

令和2年度石川県立美術館運営委員会 議事概要

1. 日時 令和2年10月23日(金) 午後4時00分～5時00分

2. 場所 石川県立美術館 大会議室

3. 出席者

(委員)

市島委員、太田委員、大樋委員、得能委員、百々委員、東委員、村井委員、山崎(達)委員、山崎(剛)委員、吉田委員

(美術館)

青柳館長、山本副館長、谷口副館長、新田総務課長、深山普及課長、村瀬文化財保存修復工房担当課長

4. 議事

- (1) 令和元年度の美術館の運営状況について
- (2) 令和2年度の運営計画・状況について
- (3) その他

5. 議事概要

館長挨拶の後、令和元年度及び令和2年度の運営状況・計画について説明をした。その後、運営状況・計画の説明に対する質問や、今後の美術館の在り方や期待することなどを委員に発言してもらった。

(館長挨拶)

日本の工芸の一番重要なことは、モノだけではなく、精神がこもっていることではないか。中国の工芸をやっている方々が「日本の工芸の技術面にはいつかは追いつくことができるが、精神をどう習得するかが、非常に難しくなかなかうまくいかない。」と言っていた。そのあたりにやっぱり日本の工芸の努力の高さがあるのではないか。この石川県立美術館に来ることができて、大変光栄に感じている。これからも皆様のご指導の下に、嶋崎先生がここまで育ててくださった石川県立美術館が、さらに輝かしい美術館になるように努力したいと思う。

(委員)

本物を見るのが一番だが、コロナ禍の中で何ができるかを考えるのもまた大事である。デジタルコンテンツにアクセスしたらそこで美術鑑賞ができ、作品にある背景や深みがわかっている機会を作れば、本物を見たときにより一層理解が深まり、魅力を感じることにつながるのではないかと思う。

(委員)

国立工芸館と県立美術館で工芸をどう使い分けるのか、実現できなくても抱負は抱負として、お聞かせいただきたい。

(館長)

国立工芸館は全国規模でコレクションを形成しているので、北陸地域限定というわけではない。県立美術館のコレクションは北陸もしくは石川あるいは金沢に特化して収集している。来館者がそういう全国的な規模のものと県立美術館の地域性を持ったものと比較したり、あるいは国立工芸館で全体的な、日本全体の工芸の在り方を観たあと、県立美術館に来て金沢もしくは石川の工芸のレベルの高さというようなものをわかってもらったりするとありがたいと思う。県立美術館のコレクションは特に加賀藩以来の伝統がある蓄積の中に育っている工芸なので、そういう歴史性とか地域性というものを国立工芸館のコレクションと比較しながら考えていただければ、日本の工芸に関する理解がもっと深まってくるのではないかと思う。その辺をうまく国立工芸館と協力しながらこれからもやっていきたいと考えている。

(委員)

国立工芸館と県立美術館の両方の共同チケットで割引制度があると若い人達が来館しやすいと思う。

(副館長)

実は明後日からオープンする国立工芸館との割引チケットを出す予定になっている。今まで、県立美術館と金沢 21 世紀美術館との間で割引をやっていたが、今度は国立工芸館だけではなくて近隣の博物館など全部で7、8館がグループを作り、共通割引制度を導入する予定である。

(委員)

立案してこれから難しいことを切り抜けていかなければいけない。国立工芸館と県立美術館がよく似た感じになって競争していくことになっていく。そのへんは、得意中の得意を見つけてやっていくしか方法がないのではないか。

(委員)

「0才からの鑑賞教育」のようなオンライン講座がやっぱりこれからの美術館に必要なことではないかなと思う。

(委員)

若い人達に美術に美術館に親しんでもらうということが一番大事だと思う。

(委員)

何回もテーマを変えながらいい作品を展示すれば、何度見てもそこに感激がある。だから、やはりいい作品を皆さんに見ていただいて感激して頂いてという形で進められたらいいのではないだろうか。

(委員)

「0才からの鑑賞教育」のようなオンラインを使った講座鑑賞はいいと思う。是非これは続けて欲しいと思う。このような企画は子供の記憶に残ると思う。NHKのテレビでお客さんが解説している入賞作品に群がる映像を見た。NHKが無料ならどンドン宣伝してもらえば、お客さんもたくさん来て頂けるのではないかと思う。

(委員)

明後日、国立工芸館がオープンすることでどんな影響があるのか。世間ではそのことについて関心が強い。その中で県立美術館と国立工芸館がいい意味で競争したりして、その後で例えば入館者数にどんなふうに影響を及ぼすのか。

(委員)

出来るだけ学生が美術館に行ける環境を整えたらいいと思う。国立工芸館にはキャンパスメンバーズという制度がある。決して無理強いはしないが、県立美術館にもキャンパスメンバーズの制度があればとてもよい。何かの機会に検討していただければと思っている。

(委員)

美術品の収集状況について、収集がないのはどうしてなのだろうか。

(副館長)

定期的購入していた九谷の作品や友禅の作品がなくなったためである。特にこれはというものが出てきた場合にはぜひとも購入するというような考えをもっている。

(委員)

美術品の購入がないのは困るとちょっと思った。来年いい作品がでてくるのではないかと思う。物語性のあるものが出ると、新聞記事にもなるし、見たいという気持ちにもなる。

(委員)

ドイツへ旅行した時に、ピンブローチ型のチケット1つで近隣の博物館を廻るという体験をした。そのチケット自体が博物館に行ってきたという記念にもなる。予算の問題もあると思うが、割引チケットを紙ではなく、工芸に特化したもので何か似たようなものを作ることができないだろうか。

(館長)

どうもありがとうございます。先程、国立工芸館と県立美術館の関係で一ついい忘れてことがある。私は日本美術の専門ではないのだが、日本美術絵画なども非常に世界の絵画から比べると工芸的であると、そして工芸は一方では美術的であると。だから本当の日本の美術全体を理解するにはいわゆるファインアートとしての美術と工芸と両方を総体としてみないと日本美術はわからない。そういう意味で国立工芸館の工芸を理解するには県立美術館

にはいい作品がたくさんあるので、そういうものを見て、日本全体のイメージを作っていた
だくことが本当の日本美術の理解につながるのではないか。そういう協同の仕方もこれか
ら考えていかねばいけない。そういうことも今先生方のお話を聞いていて感じた。そして
色々ご提案頂いた一つ一つが大変私共にとって貴重なので、それを実現するように努力し
ていきたいと思う。どうもありがとうございました。

(総務課長)

それでは以上をもちまして、令和2年度石川県立美術館運営委員会を終了致します。
なお、この委員会の議事についての概要をホームページで皆様にお知らせさせていただき
たいと考えています。
本日は、お忙しいところありがとうございました。